View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

白梅学園大学・短期大学紀要　**54**：1～18（2018）

O.F.ボルノー『人間と空間』における「住まうこと」の根幹としての「身体性」の契機について

井上　遥*

【論文要旨】

本稿では，ボルノーの「空間論」である『人間と空間』を「身体論」として捉え，その主題である「住まうこと」の根幹に「身体性」の契機が存在するということを解き明かす。

その中で，ボルノーにとって「身体」とは,「空間」に対して「媒体」としての性質を持つものであり，かつ「空間」とも不可分に「合一」し重なり合うものとして存在することによって，人間にこの世界に「住まうこと」を可能にするものであるということが明らかとなった。「媒体」として「空間」とつながるための基盤としての「身体」についてボルノーは,一点目に「空間を体験している主体の機構の一つ」として,二点目に「人間をとりまく空間の一部分」としての「体験されている客体」として，三点目に上記の「主」「客」が密接に関連しあっているものとして定義した上で「人間」と「身体」の関係性を,「所有する者」としての「主」と「所有されるモノ」としての「客」が分化した関係に回収されないものであると指摘し，これを「受肉」の概念として提示する。そしてこの「受肉」の概念を,「身体に住まう」ということを表すものであり,「身体」とその「もちぬし」である「人間」との「それ以上にさかのぼることのできない統一」として定義されるものであると提起する。

以上により「身体に住まうこと」を基盤として,「身体」が「媒体」として「空間の一部」となることによって人間がこの世界に「住まうこと」が可能となることが明らかになり，ボルノーが『人間と空間』において提起した「住まうこと」とは,「身体に住まうこと」を意味することが明らかとなった。

【キーワード】

「住まうこと」　「身体」　「身体に住まう」　「媒体」　「受肉」

＊保育科／実習指導センター

INOUE Haruka：Moment of “embodiment” as the basis of “act of dwelling” in “MENSCH UND RAUM (Humans and Space)” by O. F. Bollnow

序章　「住まうこと」における「身体」の重要性について
―ボルノーの思想の根幹を貫く「身体性」の契機―

第一節　なぜ『人間と空間』をボルノーの「身体論」として読み解くのか

O.F.ボルノー（Otto Friedrich Bollnow）（1903-91）は，20世紀のドイツを代表する教育学者・哲学者である。その思想は，ハイデガーの存在論である「実存哲学」から影響を受け，ディルタイ，ミッシュ，ノールの「生の哲学」の系譜を受け継ぐものであり，実存哲学の克服を試みる「希望の哲学」として捉えられるものである[1]。「希望」[2]とは，実存哲学で言われるところの「絶望」や「不安」，「危機」のような人間の生を揺るがす脅威の対極に存在するものであり，人間の生の確固とした支えとなるものである[3]。この「希望」こそが人間の生や教育的営みを支えるものであり，「希望」があってはじめて人間の生も教育も成り立つとボルノーは考えた。

このようなボルノーの思想には，第二次世界大戦後のドイツの社会的状況が影響を与えている。すなわち，ナチス政権下の第二次世界大戦期を経て，人間の良き面や善なる面に重きを置き，楽観的に人間存在を捉え，教育はこのような人間が生まれながらにして持つ善なる性質を引き出す力を持つものとしてあるという観点から思索を深めるだけでは不十分であるという認識の萌芽である。これを受けてボルノーは，人間存在のよるべなさ，頼りなさに着目し，「絶望」や「危機」という観点から人間存在について思索を深めた「実存哲学」における人間像から示唆を得ると共に，「外面的な生活条件ではなく，人間の内的本性と関係する根源的本性」を「生」と捉え[4]，「人間によって生きられた生」[5]とは何かを明らかにすることによって人間存在の本質を捉えようとした「生の哲学」へも軸を置き，その両者を統合するものとして，絶望を超えた「希望」を人間の生に見るという「希望の哲学」を構築した。

ボルノーはこの「希望の哲学」について，『新しい被護性』（*Neue Geborgenheit*）や『実存哲学と教育学』（E*xistenzphilosophie und Pädagogik*）で，人間存在を「一瞬のうちにのみ実現され，その瞬間とともにふたたび消滅していくもの」[6]としての「実存」的存在としてのみ捉えるのではなく，「信頼」という「人間の外部にある実在との支持的な連関」[7]によってこの世界に支えられてある存在として捉えるものとして提示した。

以上のような立場からボルノーは，教育学の中でも教育という営みをその場における人間のあり方や「雰囲気」から理解する「教育人間学」研究に着手する[8]。そこにおいてボルノーの思想の鍵となる概念が，「被護性」である。

中でも『人間と空間』（*Mensch und Raum*）とは，ボルノーが自身の学問的立場を表明した『新しい被護性』と『実存哲学と教育学』を経て，「人間の空間への関わりとは如何なるものであるのか」や「空間は人間を如何に取り巻き，人間に如何なる影響を与えて

いるのか」という観点から,「人間とは如何なる存在であるのか」について考察した論考である。その中で，人間存在の本質を指し示す概念として「住まうこと（Das Wohnen）」が提起され，これがボルノーの思想の鍵となる「被護性」と密接な関連性を持つものとして提示されている。

「住まうこと」とは，ボルノーが実存哲学との対決において，人間存在を，流動性や無常性という「時間性」を有する存在としてのみ捉えるのではなく,「空間に住まう」という観点からも捉え，これを人間が有する「空間性」の要素として提示したものである。これに基づきボルノーは，人間とは，ただ単に時間の流れに即して消え去る存在ではなく，この世界に支えられ，安定感をもって「住まうこと」によってその存在を示すことができる存在であると指摘する。

『人間と空間』においてボルノーは,「人間の現存在の空間的構え」[9]や「人間によって体験され, 生きられている空間」[10]とは如何なるものであるのかという問題を提起し，これを解明する鍵概念として，われわれ人間の生活がそこで営まれている“現実的な具体的空間”として「体験されている空間（der erlebte Raum）」を提示する。これに基づきボルノーは,「人間」と「空間」の関係性を「相互にけっして切りはなすべきではない」[11]ものであると捉え，実際にそこで生活し，活動を行う「主体」である人間が,「空間」に対して取り結ぶ関係が如何なるものであるのかを問うことが重要であると指摘する。

その上で看過してはいけないことは，ボルノーが，空間で活動を行い，かつ，その空間のあり方や構成を決定する「主体」である「人間」と, 人間の生活や活動の場となり, 人間の活動のいわば「受け手」であり「客体」となる「空間」とは, それぞれ「主」「客」が分かたれたものとして別個に存在するのではなく，それぞれが相互的にやりとりを行うものとしてその関係性が捉えられると提起していることである。その上でボルノーは,「空間性は人間の現存在の一つの本質規定である」[12]として，人間の「生」の本質が「空間性」にあると指摘する。このことからボルノーが，“人間の「生」とは,「空間」との関わり合いによってはじめて成立するものである”と捉えていることがわかる。

以上のことを踏まえてボルノーは,『人間と空間』における研究の主眼を,「人間の生の空間性と〈人間によって体験されている空間〉とは，たがいに密接な相互関係をもって対応している」[13]ということを解き明かすことに置く。そのための重要な概念としてボルノーは，人間の「空間」に対する構えを，ひいては人間が「空間」のなかに「存在する」ということ自体を「住まうこと」として提示する。

ボルノーの「住まうこと」を主題とする先行研究においても,「住まうこと」をはじめとするボルノーの思想がハイデガー（実存哲学）との密接な関連の中で成立したことを指摘した井谷（2008）[14]（2013）[15]，実存哲学が人間存在の様相として提示した「被投性」との対決の中で「被護性」を提起し，これとの関連において“人間が世界にあるべき様態”として，ボルノーが「住まうこと」を提示したと指摘した奥村（1985）[16]・川森（1970）[17]

(1981)[18]・岸（1975)[19]，教育学的観点から「被護」的環境に支えられた様態である「住まうこと」が実現されることによって人間の健やかな成長が可能となると示唆した高田(1997)[20]などがある。

本稿の課題は, ボルノーの「空間論」である『人間と空間』を「身体論」として捉え,「住まうこと」の根幹に「身体性」の契機が存在するということを明らかにした上で, ボルノーにとって「身体」とは如何なる概念であるのかを解き明かすことである。それでは何故,『人間と空間』をボルノーの「身体論」として読み解くのか。

まずボルノー自身が『人間と空間』の中で,「身体」を主題にした箇所（第五章第二節の 2 ）を設けているからである。このことはボルノーが,「住まうこと」の基軸に「身体」を据えていることを指し示すことである。

またボルノーは『人間と空間』において,「空間」の性質を「媒体」として提示すると共に,「身体」を「空間」(「『身体』という一つの『空間』」[21]）と捉える。このことからボルノーが,「『身体』という一つの『空間』」が「媒体」となり，それを取り巻く「空間」と「主客未分」の関係性でつながることによって, 人間にこの世界に「住まうこと」を可能にすると捉えていることが明らかとなる。このことは,「身体」が「住まうこと」と密接な関連性をもつ概念であり,「住まうこと」の根幹には,「身体性」の契機が存在するということを指し示すことである。それ故に,「住まうこと」の根幹には「身体性」の契機が存在するということを明らかにすることは,「住まうこと」を通して人間存在の本質を解き明かそうとした『人間と空間』の主題の核心に迫ることであり，ボルノーの思想の根幹を成すものを，従来の研究では着目されていなかった観点から明らかにするという意義を持つことでもある。

“『人間と空間』の主題の核心に迫ること”すなわち“「身体」を基盤にして「住まうこと」の本質に迫ること”の中で,「受肉」の概念が鍵となり，ボルノーが人間存在を支える二つの概念として提示した,「住まうこと」と「被護性」の関係性（「被護性」とは, 人間に「住まうこと」を可能にするための必要不可欠な要素である）が明らかになる。それ故に，ボルノーの思想の根幹にあるものやボルノーの人間理解を支えるものを明らかにするためには,「身体性」の契機に着目することが重要である。

第二節　「考察の鍵」としての「身体に住まう」という概念について

上記の課題を論じるために，考察の鍵として着目する概念がある。それが,「(心は) 身体に住まう（Die Seele bewohnt den Leib)」[22]という概念である。本稿ではこれを,「住まうこと」の核心に迫るための概念として注目する。

ボルノーは『人間と空間』において，メルロ＝ポンティに依拠して「身体に住まう」という概念に着目し,「身体」との関連性の中で「住まうこと」の本質を明らかにしようとする。湯浅（1977)[23]が指摘したように，メルロ=ポンティはボルノーが思想構築にあ

たって影響を受けたハイデガーに依拠して，主体性をもった人間の存在様式として「世界内存在」を提示し身体論を構築していることから，ボルノーの思想と密接な関連をもつ思想家として着目すべきである。

本稿では，第一章第一節においてボルノーが『人間と空間』の中で「住まうこと」を如何に定義しているのか確認する。第二節では，ボルノーが「住まうこと」において「身体」を如何なる役割を果たすものであると捉えているのかについて明らかにする。ここでは「住まうこと」とはボルノーがメルロ＝ポンティの「habiter」に依拠し構築した概念であることを踏まえて，「住まうこと」が可能となるために「身体」が如何なる役割を果たすものであると捉えているのか解き明かす。第二章第一節では，ボルノーにとって「身体」とは如何なる概念であるのかについて明らかにする。これを踏まえて第二節では，「住まうこと」の基盤として「身体に住まう」という概念が存在することを提起する。結章ではボルノーの「住まうこと」の根幹には「身体性」の契機が存在することを指摘した上で，ボルノーの人間理解の根底を貫く重要な契機として，「身体性」が存在するということを提示する。

第一章　「住まうこと」とは何か

第一節　ボルノーは『人間と空間』において「住まうこと」を如何に定義しているのか

『人間と空間』においてボルノーは，「住まうこと」を「世間からはなれたやすらぎの領域」[24]すなわち「人間がそのなかでは脅迫的な外部世界から身をひいていることのできる」[25]場所である「家屋という自分自身の空間をもつこと」[26]であり，「恒常的で外部世界から分離されている住居のなかでの滞留」[27]であると定義する。ここから「住まうこと」とは，“外部世界の危険性から被護されたやすらぎの空間”である「家屋」と密接な関係を持つ概念であることがわかる。

人間に「住まうこと」を可能にする空間である「家屋」についてボルノーは，その「被護」的性質に着目する。人間によって築かれ，公共の空間から分離された私的領域である家屋とは，人間にとって「安全に被護し守護するものの領域」[28]として捉えられ得るものである。ここからボルノーは，「住まうこと」とは「安全に被護されていると感じながら滞在すること」[29]であり，「被護性（Die Geborgenheit）」[30]と密接に結びついた概念であると定義する。

更にここで注目すべきことは，ボルノーが『教育的雰囲気』（*Die Pädagogische Atmosphäre*）[31]においても，『人間と空間』で提起されている「住まうこと」の実現が，人間の健やかな成長にとって必要不可欠であると指摘していることである[32]。ここでボルノーは，「外部の未知なる世界」[33]に対して「内部の包護的な世界」[34]を所有することが人

間の生にとって重要なことであり，人間とは,「世の中で果すべき責務から，いつもこの『うち』へ再び立ち帰り，そのなかで安定感をもつことができ，世の中の障礙や脅威から保護されて，身内のものといっしょに『すまう』ことができる」[35]ことによって，この世界で生きていくことができる存在であると指摘する[36]。

その上でボルノーは『人間と空間』において，“「住まうこと」とは「人間が自分の家のなかで生活するその仕方」を表す概念である”ということと絡めて,「住まうこと」とは「人間的生の根本的構えの一つ」[37]を表す概念であると指摘する。ここでボルノーは人間が自分の家に住まうというあり方を，実存主義の「投げ出されて（geworfen）」あることの対極にあることと捉える。すなわち「住まうこと」とは,「たんなる存在すること，あるいはその場所にいること以上のこと」[38]として捉え得る人間の一様態であり,「一定の場所でそこをわが家としてくつろぎ，その場所に根をおろし，その場所に適合していること」[39]である。これらを総括してボルノーは「住まうことのなかでのみ人間はその真の本質を実現することができる」[40]と指摘する。この言葉から, ボルノーが「住まうこと」を，人間がその本質を実現するために不可欠な要素であると捉えていることが明らかとなる。

これを踏まえてボルノーは,「住まうこと」とは「人間の空間への関係，つまり空間のなかの在り方を全体として性格づける，より普遍的な意味」[41]を持つ概念であることから,「人間の空間性が，全体として，住まうことである」[42]と定義する。これらの指摘によって，ボルノーにとって「住まうこと」とは,“人間が空間とのあいだで取り結ぶ，その関係そのもの”であるということがわかる。また「人間の空間性が，全体として，住まうことである」という言葉からは，ボルノーが「住まうこと」を“人間が空間の中に存在する”というあり方そのものであると捉えていることが明らかとなる。すなわちボルノーにとって「住まうこと」とは,“人間がこの世界に存在することそのもの”を指し示す概念である。

第二節　「住まうこと」における「身体」の役割について
―メルロ=ポンティ「habiter」との関連における「住まうこと」―

それではボルノーは,「住まうこと」における「身体」の役割について如何に捉えているのか。これに関して，ボルノーが『人間と空間』第五章第一節の 4 において，メルロ=ポンティの「habiter（住まう）」に依拠して「身体」との関連性を示唆する中で,「住まうこと」とは如何なる概念であるのかについて解き明かそうとする箇所に着目する。

まずボルノーは，メルロ=ポンティが「habiter」を,「家屋に居住する」[43]ことを意味するものとして定義していることに着目し，これを「別の，拡大され転移された諸意義」[44]から理解される必要があると指摘する。

これに関してボルノーは，メルロ=ポンティの「habiter」とは「身体にたいする心の関

係を特徴づける」[45]ものであるとの定義に着目する。その中でボルノーは，メルロ=ポンティの「心は身体に居住する」[46]という言葉や，「受肉（die Inkarnation）」[47]の概念（「ある空間的形成物における心の『受肉』」[48]という言葉や，「家屋に住む」とは，「受肉の一種」であると定義されていること[49]）によって，メルロ=ポンティが，“「心」とは「身体」という「家屋」に住まうものである”と指摘していると補足する。そしてボルノーは，ここでメルロ=ポンティが「身体」と「心」の関係を「受肉」という概念で言い表すのは，彼が「心は，人間が自分の家屋を離れることができるようには，身体という『住居』を離れることはできない」[50]と捉えているからであり，「心は，そもそも生命から切りはなされることなしにそれを『脱ぐ』ことはできない」[51]と捉えているからであると指摘する。ここから，メルロ=ポンティが“人間”とは，“「心」が「身体」と結びつき，「受肉」することによって存在することが可能となる存在”であると捉えており，「受肉」とは，“「心」が「身体」に「住まう」こと”を言い表す概念であることが明らかとなる。故に「身体に住まう」とは「受肉」との関連性の中で解明されるべき概念であり，ボルノーが定義する「住まうこと」とは，人間が存在する上での根幹となる「身体」を基盤として可能となる様態である。すなわち，「住まうこと」とは「身体に住まうこと」そのものである。

ボルノーの「住まうこと」とは「身体に住まうこと」を意味しているということについて掘り下げるために，メルロ=ポンティが「habiter」とは「人間は世界に居住する」[52]という意味が込められた概念であると定義していることに注目してボルノーが論を展開している箇所に着目する。

ここでボルノーは，メルロ=ポンティの「人間は世界に居住する」という言葉について，「人間は任意にこの世界にあらわれ出ているのではなく，人間と世界とは心がその身体にたいするのと同じような関係，表現されているもののその表現への関係と同じように，全面的な信頼関係によってむすびついていること」[53]であると定義する。ここからボルノーは，メルロ=ポンティが，「居住すること」とは，「一つの全面的に信頼し了解してむすびついている形式を意味している」[54]と定義していることに着目し，これと絡めて「人間は諸物に居住する」[55]という言葉を提示して，「人間がきわめて内面的に諸物とむすびついているので，それらの物は人間にとってもはや外的な対象物ではなく，より深遠な存在の担い手として人間の生に組み入れられている」[56]ことを意味するものとして定義する。

これを踏まえてボルノーは，以下のように続ける。

「これまで展開してきた言語理解をまとめてみると，住まうという概念は心的なものが身体的なものの『なかに』身体化している，そのわかちがたい統一を言いあらわすのに使われている。したがって，さらにこの概念は，一般的な仕方で人間の空間への関係を示すのにも利用することができる」[57]。

ここでボルノーは，「住まう」ということが，「心的なものが身体的なものの『なかに』身体化している，そのわかちがたい統一」を指し示す概念として捉えられていることを指摘した上で，「心」と「身体」の間で形成される「わかちがたい統一」の関係が，「人間」と「空間」の間に築かれる関係にも見られると指摘する。

この“一人の人間における「心」と「身体」の間で形成される「わかちがたい統一」”が「人間」とそれをとりまく「空間」の間で形成される関係性にも見られるということに関して，ボルノーは「身体」を鍵として以下のように指摘する。

「メルロ=ポンティがわれわれの身体そのものを，その空間的であるということで，他のあらゆる空間経験の原形式としてとらえようとしていることが，いうまでもなく，さらに重要なことである。彼はある箇所で，『身体は心の郷土空間であり，また他の現にある空間のすべてにたいする母型である』と述べている。身体は，ここでは，たんにそれをとおして空間が経験される道具であるばかりでなく，それ自身が一つの経験されている空間，それも，もっとも根源的な経験されている空間であり，このひな型に即してあらゆる他の空間が理解されるのである。こうしてわれわれは，空間を欠いた主体としてではなく，身体をとおしてそれ自身空間的な形成物として，より大きな包括的空間のなかへ埋めこまれているのである」[58]。

ここでボルノーは，メルロ=ポンティが「身体」を「空間的」なものであり，「他のあらゆる空間経験の現形式」として捉えようとしていることに着目する。その上で，メルロ=ポンティの「身体は心の郷土空間であり，他の現にある空間のすべてにたいする母型である」という言葉を引き，「身体」とは，「心」が「住まう」ための場所（「郷土空間」）であり，それ故に「身体」と「心」の関係性とは，「人間」が「空間」に対して取り持つ関係性（「わかちがたい統一」）の「母型」（「原型」・「ひな型」）となると指摘する。これに基づいてボルノーは「身体」を,「それ自身が一つの経験されている空間」であり，「もっとも根源的な経験されている空間」であり，「あらゆる空間を理解するためのひな型」であると指摘する。このことから，ボルノーが「身体」を，それ自体が一つの「空間」として存在するものであると捉えていることがわかる。これをボルノーは，「われわれ（人間）は，空間を欠いた主体としてではなく，身体をとおしてそれ自身空間的な形成物として，より大きな包括的空間のなかへ埋めこまれている」という言葉で指摘する。ここから，ボルノーにとって「人間」とは「身体を基盤としてこの世界に存在するもの」であるからこそ，その存在自体が“「空間的な形成物」として存在するもの”であり,「小さな空間」である「身体」を通して，“「身体」を含めた「場」そのものである「より大きな包括的空間」のなかへ埋めこまれている存在”であることが明らかとなる。

更にボルノーは，メルロ=ポンティの「身体は空間および時間に居住する」[59]という言葉を引用して，「住まうということは，状況に関与し，それと関係をむすんでいることと

同列にもちいられ，それによって世界を欠いている主体という観念は退けられている」[60]として，人間は「住まうこと」において世界に“関与する「主体」”として存在すると指摘する。このことから，ボルノーが，「身体」が人間に「住まうこと」を可能にする重要な要素であると捉えていることが明らかとなる。

第二章　ボルノーにとって「身体」とは如何なる概念であるのか

第一節　ボルノーにとって「身体」とは何か

第一章第二節での，ボルノーによるメルロ=ポンティの「habiter」解釈において，「habiter」とは「人間は世界に居住する」という意味が込められた概念であるということを検討した箇所において，ボルノーがメルロ=ポンティの「身体は心の郷土空間であり，他の現にある空間のすべてにたいする母型である」との言葉に依拠して，「身体」を「それ自身が一つの経験されている空間」であり，「もっとも根源的な経験されている空間」であり，「あらゆる空間を理解するためのひな型」であると指摘していることについて確認した。このことからボルノーにとって「身体」とは，それ自体が“一つの「空間」”として存在するものであることが明らかとなった。これを踏まえたボルノーの「われわれ（人間）は，空間を欠いた主体としてではなく，身体をとおしてそれ自身空間的な形成物として，より大きな包括的空間のなかへ埋めこまれている」という言葉から，彼が「人間」とは「身体を基盤としてこの世界に存在するもの」であると捉えていることを確認した。これを踏まえて，ボルノーにとって「人間」とは，その存在自体が“「空間的な形成物」として存在するもの”であり，“「小さな空間」である「身体」を通して，「身体」を含めた「場」そのものである「より大きな包括的空間」のなかへ埋めこまれている存在”として捉えられていることについても確認した。ここから『人間と空間』の主題として，「身体」が重要な鍵を握ることがわかる。

本節では，ボルノーの「身体」概念を明らかにする。まず手がかりとするのが，ボルノーが「志向的空間」について言及した箇所である。ボルノーにとって「志向性（die Intentionalität）」[61]とは，「人間」が「自分のまわりの世界とかかわりをもつ主体」[62]（「志向性という特徴をもつ主体」[63]）であるということを指し示す概念である。ここでボルノーは，「志向的空間（der intentionale Raum）」[64]という概念によって，人間と空間の関係について捉えようとする。その中でボルノーは，「人間が空間のなかにいるその仕方は，人間をまわりからかこんでいる世界空間の規定ではなく，主体としての人間に関連づけられている志向的な空間の規定なのである」[65]という言葉によって，「人間」とは，“空間の中に存在する際に，ただ単に空間の中にある「物」とは異なり，「主体的に」，自分の周囲の世界とつながり，かかわりを持とうとする存在（「主体」）”であると指摘する。

これを踏まえてボルノーは,「空間」の性質を,「媒体（das Medium）」[66]として捉える。そしてその意味を,「空間は『対象』と『直観形式』との中間者なのであって，主観から独立の『入れ物』でもなければ，たんに主観的な構想物でもない」[67]という言葉や,「直接の空間経験において現象としてあたえられているもの」[68]という言葉,「空間と世界，あるいは，空間のなかに存在すること〔世界―内―存在〕とは相互に接近することになるし，また時には，ほとんど同じことを意味するようになりうる」[69]という言葉によって捉える。以上のように「媒体」として「空間」の概念を提示していることから，ボルノーが「人間」と「空間」の関係性を,「主」「客」が重なり合うものとして捉えていることが明らかとなる。

これを踏まえると，ボルノーにとって「身体」とは如何なる概念として立ち現れてくるのか。これに関してボルノーは,『人間と空間』第五章第二節の 2 において,「身体」の様相を以下の三点として定義する。

「身体は，一つにはその助けをかりて，すなわちその諸感覚器官と運動能力とをとおしてわれわれに空間があたえられている道具である。そのかぎりで身体は，空間を体験している主体の機構の一つである」[70]（定義①）。

「身体は，次にそれ自身一つの空間であり，一つの自分自身の空間である。それと同時に，われわれをとりまく空間の一部分でもある。そのかぎりで身体は，体験されている客体の側に属する」[71]（定義②）。

これら二点を踏まえた上で，ボルノーは以下のように指摘する。

「そして，独特の困難さは，この両者がさらにきわめて密接にたがいに関連しあっていることにもとづいている」[72]（定義③＝定義①＋②）。

ここでボルノーは，定義①において,「身体」とは,「空間」（この「世界」そのもの）を「体験し」，その「身体」のいわば「もちぬし」である「人間」に伝達するという役割を担う「主体」として存在するものであると指摘する。ここでは「空間」にはたらきかける「主体」として,「身体」の持つ「志向性」の性質が明らかとなる。しかしながら定義②においては,「主体」としての役割を担う「身体」自体も，固有の容積・面積を所有する「空間」であり，その意味では“人間を取り巻く環境”として,「客体」（「体験されている客体」）の側に位置するものであるということが指摘される。そして定義①・②を統括した形で，定義③においてボルノーは，“両者（「主」「客」）が「きわめて密接にたがいに関連しあっている」ということ”が,「身体とは何か」ということを,「空間論」として問う際の困難を生み出していると指摘する。

さらにボルノーは,「身体は，直接の意味では私の自我の『座』であり，そして空間的世界の全体は，身体をとおしてはじめて私に伝えられる」[73]という言葉や,「私は私の身体をとおして空間的世界のなかへ入れられている」[74]という言葉によって，定義①で明らかになった「主体」（「空間」を「体験し」，その「身体」の「もちぬし」である「人間」

に「空間」を伝達する）としての役割を担う「身体」の様相について言及する。また，「身体は，私がそれをとおしていわば空間のなかへはめこまれている，それ自身ひとつの空間的にひろがった形成物である」[75]という言葉や，「それ（身体）は，それ固有の空間容積をもち，表面によって外部にたいして境界づけられているものである」[76]という言葉，「（身体は）外部空間から区別された，現実に一種の内部空間」[77]という言葉によって，定義②で示された，「身体」自体も，固有の容積・面積を所有する「空間」であり，その意味では“人間を取り巻く環境”として，「客体」の側に位置するものであると指摘する。その上で，「身体は，そのような一つの空間形成物としてもはや純粋な主観ではなく，かといって純粋な客体でもなく，むしろ独特に，どちらともきめられないものである」[78]という言葉によって，定義③において明らかとなった，「身体」とは「主」「客」が密接に関連しあって成立するものである，という「身体」の性質について指摘する。

この定義③において明らかとなった，“「身体」においては，「主」「客」が密接に関連しあっている”ために，「身体とは何か」を明らかにすることが困難になっている，ということと絡めてボルノーは，いわば「身体」の「もちぬし」である「人間」とは，それを如何に“所有する”のか（「人間の自分の身体への関係はそもそもどのように規定されるべきなのか」[79]）という問いを提起する。これに関してボルノーは，「自分の身体は一般にその注意の視界に入ってこない」[80]という言葉や「（人間は）常にその身体をこえて直接に自分の世界の諸物のもとにいる」[81]という言葉，「私は，私の身体のもとにではなく，いつもすでに私の身体をこえて，私がかかわりあっている諸物のもとにいる」[82]という言葉によって，「身体」を，通常の所有関係（「所有する者」としての「主」と「所有されるモノ」としての「客」が分化した関係）に回収されないものであると指摘する。

第二節　「身体に住まう」とは何か

以上のようにボルノーはメルロ=ポンティを参照しながら，人間と身体との関係性を「受肉」の概念によって指摘する。これに関してボルノーは，「人間は，自分の身体とは何らかの仕方でもっと密接にむすびついている」[83]ので，「人間は自分の身体をその他の所有物を所有するような仕方で『所有』していない」[84]ということと関連したことであるとして，このような「人間」と「身体」の間の「受肉」の関係性を「身体は，生き生きと使用しているときにはつねにすでにわが物なのであり，すでにその人格のなかに組み入れられている」[85]という言葉や，「人間は，何らかの仕方で自分の身体『である』」[86]という言葉，「このことは，人格と身体とを区別しない素朴な意識にも直接に対応している」[87]という言葉によって指摘し，以下の言葉を提示する。

「メルロ=ポンティが，私は私の身体に住まう，と言うとき，彼もほかならぬこの神秘的な，それ以上にさかのぼることのできない統一を心にとめているのである。何かに住まう（in etwas wohnen）ということは，何かのなかに受肉している（in etwas inkarniert

sein）ことを言うのである」[88]。

ここでボルノーは，メルロ=ポンティに依拠しながら，「身体に住まう」という概念が，「身体」と，その「もちぬし」である「人間」との「それ以上にさかのぼることのできない統一」として定義されるものであると指摘する。これをボルノーはメルロ=ポンティの言葉を借りて，「受肉」という概念によって言い表す。このことからボルノーが，「身体」と「人間」の間には，「所有する者」と「所有されるモノ」に分かたれる「隔たり」がないと捉えていることがわかる。

これらを踏まえてボルノーは，“「人間」と「身体」の関係性”を言い表す「受肉」の概念を「空間」へも拡張し，“「人間」と「空間」の関係性”を言い表す概念としても提示する。これに関してボルノーは，『人間と空間』第五章第二節の 4 において，「人間は空間において受肉しているということ，あるいは，人間は空間に住んでいるということは，人間がそこである状況のなかにいるということ以上のことを意味している」[89]という言葉によって，「人間が空間に住まう」ということは，人間がただ単にその空間の中に存在しているということ以上のことを意味することであり，「人間が空間において受肉している」ということと同義であると指摘する。このボルノーの指摘により，「身体に住まう」こととは，「住まうこと」そのものであることが明らかとなる。これに関してボルノーは以下のように述べる。

「それは，人間がある媒体のなかにいて，この媒体のなかで移動することができるということだけではなく，人間自身がこの媒体の部分であるということ，すなわち境界によってこの媒体の他の部分から分離されてはいるが，なおその境界をこえてこの媒体とむすびついており，この媒体によって担われささえられているということを意味しているのである」[90]。

ここでボルノーは，“「人間が空間において受肉している」ということの意味とは，「人間自身がこの媒体（空間）の部分である」ということであり，「境界をこえてこの媒体（空間）とむすびついており，この媒体（空間）によって担われささえられている」ということである”という言葉によって示そうとする。すなわちここでボルノーは，「住まうこと」として示される“人間と空間の関係性”とは，“人間と身体の関係性”同様に，「主」「客」に分かたれたものとして存在するのではなく，両者が不可分に「合一」し，重なり合うものとして捉えられ得るものであると指摘する。

またここでボルノーが“「人間が空間において受肉している」ということの意味とは，「人間自身がこの媒体（空間）の部分である」ことである”と提起していることから，ボルノーにとって「身体」とは「空間」同様に，周囲の「空間」と結びつき，その「部分」となる，「媒体」の性質を有する概念であることが明らかとなる。

結章　「住まうこと」の根幹としての「身体性」の契機について

ボルノーにとって「身体」とは,「媒体」として「空間」と不可分に「合一」し重なり合うものとして存在することによって，人間にこの世界に「住まうこと」を可能にするものである。

「身体」についてボルノーは，一点目に「空間を体験している主体」として，二点目に「体験されている客体」として，三点目に「主」「客」が密接に関連しあっているものとして定義し，「人間」と「身体」の関係性を，「所有する者」としての「主」と「所有されるモノ」としての「客」が分化した関係に回収されないものであると指摘した。これを「受肉」と定義し，「身体に住まう」ということの性質を表し，「身体」と「人間」の「それ以上にさかのぼることのできない統一」として定義されるものであると提起した。これを踏まえてボルノーは,「人間が空間に住まう」ということは「人間が空間において受肉している」ということと同義であるとして,「受肉」の概念を「人間」と「空間」の関係性を言い表す概念としても提示し,「身体に住まう」こととは「住まうこと」そのものであると指摘する。

またボルノーはメルロ=ポンティに依拠して「住まうこと」とは何かを探究する中で,「住まうこと」が可能となるためには,「人間が身体に受肉する」(「心が身体に住まう」)ことが必要不可欠であり,「身体」とは「心」が「住まう」ための「郷土空間」であり，それ故に「身体」と「心」の関係性とは,「人間」が「空間」に対して取り持つ「わかちがたい統一」の「母型」となると指摘した。このことから，ボルノーにとって「人間」とは,「身体」という「一つの空間」を基盤としてはじめて,“「身体」を含めた「場」そのものである「より大きな包括的空間」のなかへ埋めこまれること（住まうこと）が可能となる存在”であることが明らかとなる。

以上の指摘により，ボルノーの「住まうこと」の根幹には「身体性」の契機が存在することが明らかとなったが，このことは同時に，ボルノーの思想（人間理解）の根底を貫く重要な契機として,「身体性」が存在するということを指し示すことである。

今後の課題として，ボルノーの人間理解としての「住まうこと」の根幹に「身体性」の契機があるという観点を更に深めるために，ボルノーの時間論である『時へのかかわり』(*Das Verhältnis zur Zeit*）における「時間に住まう」ことという観点にも着目し，ボルノーが人間存在のあるべき様態としての「内的統一」として捉えた「住まうこと」の全貌を,「身体性」の契機を軸にして明らかにしていきたい。

註

1 「希望の哲学」については，『思索と生涯を語る』の中で，ボルノー自身がその立場にあることについて言及している。（オットー・フリードリヒ・ボルノー，H.-P.ゲベラー・H.-U.レッシング編，石橋哲成訳『思索と生涯を語る』玉川大学出版部，1991年。）

2 Otto Friedrich Bollnow, *Neue Geborgenheit. Das Problem einer Überwindung des Existentialismus.* 5. Bd. Königshausen & Neumann, Würzburg, 2011.
(Drucknachweis Stuttgart/Köln 1955; 3. Überarb. Aufl. Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz 1972; 4. Aufl. Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz 1979)

3 ボルノーの哲学的立場については，『気分の本質』（藤縄千艸訳，筑摩書房，1973年）の「日本語版へのまえがき」を参照のこと。

4 Otto Friedrich Bollnow, *Die Lebensphilosophie,* Springer-Verlag, Berlin/Göttingen/Heidelberg, 1958, S. 4 .
（O.F.ボルノー，戸田春夫訳『生の哲学』玉川大学出版部，1975年，20頁。）

5 *Ibid.,* S.12.（同上，30頁。）

6 Otto Friedrich Bollnow, *Existenzphilosophie und Pädagogik : Versuch über unstetige Formen der Erziehung,* 5., durchges. Auflage, Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz, 1977, S.15.
（O.F.ボルノー，峰島旭雄訳『実存哲学と教育学』理想社，1966年，18頁。）

7 Bollnow, *Neue Geborgenheit* , S.11.
（O.F.ボルノー，須田秀幸訳『実存主義克服の問題―新しい被護性―』未来社，1969年，20頁。）

8 ボルノーの教育人間学的立場については，『教育学における人間学的見方』（岡本英明訳，玉川大学出版部，1977年）を参照のこと。

9 Otto Friedrich Bollnow, *Mensch und Raum,* 6. Bd. Königshausen & Neumann, Würzburg, 2011, S.1.
(Drucknachweis 1.Aufl. Stuttgart 1963; 7.Aufl. Stuttgart/Berlin/Köln 1994)
（オットー・フリードリッヒ・ボルノウ，大塚恵一・池川健司・中村浩平訳『人間と空間』せりか書房，1978年，13頁。）

10 *Ibid.,* S. 1 .（同上，13頁。）

11 *Ibid.,* S. 5 .（同上，17頁。）

12 *Ibid.,* S. 9 .（同上，21頁。）

13 *Ibid.,* S.10.（同上，22頁。）

14 井谷信彦「『住まうこと』と世界の奥行き：O.F.ボルノウ『新しい庇護性』再考」『教育哲学研究』(98)，2008年，39-57頁。

15 井谷信彦『存在論と宙吊りの教育学―ボルノウ教育学再考』京都大学学術出版会, 2013年。

16 奥村和滋「希望の教育と生きられた空間―ボルノウに学ぶ人間形成の原空間―」『サピエンチア：英知大学論叢』(19)，1985年，35-56頁。

17 川森康喜「ボルノウの『空間』―とくに空間における安らぎについて―」『教育（龍谷大学）』(6)，1970年，15-24頁。

18 川森康喜「ボルノウの『空間』について―それの教育人間学的考察―」『龍谷大学論集』(419)，1981年，68-89頁。

19　岸信行「ボルノウ人間学に於ける根本問題―居住空間の問題を中心として―」『哲学会誌（学習院大学）』(3)，15-45頁。
20　高田久美子「ボルノーの思想の援用による人間が住まうことの意味（第 2 報）―庇護空間の意味と教育への広がり―」『研究紀要（鹿児島純心女子短期大学）』(27)，1997年，1-11頁。
21　Bollnow, *Mensch und Raum,* S.234.（『人間と空間』，271頁。）
22　*Ibid.,* S.227.（同上，263頁。）
23　湯浅泰雄『身体―東洋的身心論の試み―』創文社，1977年。
24　Bollnow, *Mensch und Raum,* S.226.（『人間と空間』，262頁。）
25　*Ibid.,* S.226.（同上，262頁。）
26　*Ibid.,* S.226.（同上，262頁。）
27　*Ibid.,* S.226.（同上，262頁。）
28　*Ibid.,* S.117.（同上，141頁。）
29　*Ibid.,* S.117.（同上，141頁。）
30　“Die Geborgenheit”については，他に「庇護性」，「被包感」等の訳があるが，本稿では「被護性」に統一し表記した。
31　Otto Friedrich Bollnow, *Die Pädagogische Atmosphäre.*
Unterschungen über die gefühlsässigen zwischenmenschlichen Voraussetzungen der Erziehung. Anthropologie und Erziehung. 12. Bd. Quelle und Meyer, Heidelberg, 1964, 4 Aufl. 1970.
（O.F.ボルノウ，森昭・岡田渥美訳『教育を支えるもの』黎明書房，2006年。）
32　*Ibid.,* S.23-26.（同上，60-66頁。）
33　*Ibid.,* S.26.（同上，65頁。）
34　*Ibid.,* S.26.（同上，65頁。）
35　*Ibid.,* S.26.（同上，66頁。）
36　*Ibid,* S.26.（同上，65-66頁。）
37　Bollnow, *Mensch und Raum,* S.97.（『人間と空間』，121頁。）
38　*Ibid.,* S.97.（同上，121頁。）
39　*Ibid.,* S.97.（同上，121頁。）
40　*Ibid.,* S.97.（同上，122頁。）
41　*Ibid.,* S.226.（同上，262頁。）
42　*Ibid.,* S.226.（同上，262頁。）
43　*Ibid.,* S.227.（同上，263頁。）
44　*Ibid.,* S.227.（同上，263頁。）
45　Bollnow, *Ibid.,* S.227.（同上，263頁。）
／Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception,* Gallimard, Paris, 1976(c1945), pp.160-161.（M.メルロー＝ポンティ，竹内芳郎・小木貞孝共訳『知覚の現象学 1 』みすず書房，1967年，232-233頁。）
46　Bollnow, *Ibid.,* S.227.（同上，263頁。）
／Merleau-Ponty, *Ibid.,* pp.160-161.（同上，235頁。）
47　Bollnow, *Ibid.,* S.227.（同上，263頁。）
／Merleau-Ponty, *Ibid.,* pp.160-161.（同上，235頁。）
48　Bollnow, *Ibid.,* S.227.（同上，263頁。）
／Merleau-Ponty, *Ibid.,* pp.160-161.（同上，235頁。）

49 Bollnow, *Ibid.,* S.227.（同上，264頁。）
／Merleau-Ponty, *Ibid.,* pp.160-161.（同上，235頁。）
50 Bollnow, *Ibid.,* S.227.（同上，264頁。）
／Merleau-Ponty, *Ibid.,* pp.160-161.（同上，235頁。）
51 Bollnow, *Ibid.,* S.227.（同上，264頁。）
／Merleau-Ponty, *Ibid.,* pp.160-161.（同上，235頁。）
52 Bollnow, *Ibid.,* S.228.（同上，264頁。）
／Merleau-Ponty, *Ibid.,* p.328.（M.メルロー＝ポンティ，竹内芳郎・木田元・宮本忠雄共訳『知覚の現象学２』みすず書房，1974年，118頁。）
53 Bollnow, *Ibid.,* S.228.（同上，264頁。）
54 Bollnow, *Ibid.,* S.228.（同上，264頁。）
／Merleau-Ponty, *op. cit.,* p.328, p.340.（『知覚の現象学２』，118-119頁，134-135頁。）
55 Bollnow, *Ibid.,* S.228.（同上，264頁。）
56 *Ibid.,* S.228.（同上，264頁。）
57 *Ibid.,* S.228.（同上，264頁。）
58 *Ibid.,* S.229.（同上，265頁。）
59 Bollnow, *Ibid.,* S.229.（同上，265頁。）
／Merleau-Ponty, *op. cit.,* p.162.（『知覚の現象学１』，235頁。）
60 Bollnow, *Ibid.,* S.229.（同上，265頁。）
61 *Ibid.,* S.221.（同上，257頁。）
62 *Ibid.,* S.221.（同上，257頁。）
63 *Ibid.,* S.221.（同上，257頁。）
64 *Ibid.,* S.221.（同上，257頁。）
65 *Ibid.,* S.221.（同上，257頁。）
66 *Ibid.,* S.222.（同上，258頁。）
67 *Ibid.,* S.223.（同上，259頁。）
68 *Ibid.,* S.223.（同上，259頁。）
69 *Ibid.,* S.223.（同上，260頁。）
70 *Ibid.,* S.234.（同上，271頁。）
71 *Ibid.,* S.234.（同上，271頁。）
72 *Ibid.,* S.234.（同上，271頁。）
73 *Ibid.,* S.235.（同上，272頁。）
74 *Ibid.,* S.235.（同上，272頁。）
75 *Ibid.,* S.235.（同上，272頁。）
76 *Ibid.,* S.235.（同上，272頁。）
77 *Ibid.,* S.235.（同上，272頁。）
78 *Ibid.,* S.235.（同上，272頁。）
79 *Ibid.,* S.236.（同上，272頁。）
80 *Ibid.,* S.236.（同上，272頁。）
81 *Ibid.,* S.236.（同上，272-273頁。）
82 *Ibid.,* S.236.（同上，273頁。）

83　*Ibid.,* S.237.（同上，273頁。）
84　*Ibid.,* S.237.（同上，273頁。）
85　*Ibid.,* S.237.（同上，274頁。）
86　*Ibid.,* S.237.（同上，274頁。）
87　*Ibid.,* S.237.（同上，274頁。）
88　*Ibid.,* S.238.（同上，275頁。）
89　*Ibid.,* S.249.（同上，286頁。）
90　*Ibid.,* S.249.（同上，286頁。）